

HELP展 in SHIGA

私たちの琵琶湖を守る

HELP展 in SHIGAという展示会が8/10・11に旧大津公会堂で行われた。主催のグリーンピース・ジャパンは国際環境NGO団体。HELP展を通して気候変動について知ってもらおうと活動している。その中で行われたトークイベントでは、『琵琶湖と気候変動』をテーマに立場の異なる4人の対談が行われた。

琵琶湖は酸素不足！

2019、2020年は琵琶湖の深呼吸が起らなかった。琵琶湖では冬場に冷たい水がもぐりこんで、深層の水と表層の水が混ざり、均一になる。このとき同時に琵琶湖の底にも酸素が行きわたる。これを琵琶湖の深呼吸と呼んでいる。この深呼吸がうまく起これなければ、湖底は酸素不足になる。原因のひとつとして気候変動があげられる。

有用魚類の危機！

気候変動の影響で鮎の資源量がかなり減少している。産卵のタイミングで例年より気温が高いことや、雨が降らずに渇水になることが原因と言われている。漁師の駒井氏によると、今年の収穫は例年の一割未満だったという。また、ビワマスは水通しの良い川を遡上して卵を産む。しかし渇水になると川の水が途中で切れてしまい、川を遡上できなくなってしまうことがある。

第3の外来魚！

日本第2位の広さの茨城県霞ヶ浦には、『チャネルキャットフィッシュ』

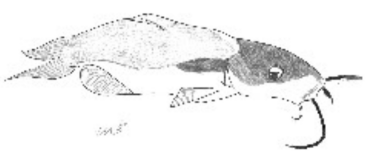
「シュ」という魚が多く釣れる。この魚が琵琶湖でも発見された。チャネルキャットフィッシュが繁殖すると貝類がいなくなってしまう可能性がある。どのようにして琵琶湖に入ってきたのかは分かっていない。

外来植物の影響

魚以外にも外来の植物も問題になっている。琵琶湖で見られる外来の植物は主に二種類あり、オオバナミズキンバエ(左写真)とナガエツルノゲイトウだ。外来の水草が繁茂すると水中の酸素が減ってしまい魚が息がでず死んでしまったり、住みにくくなる。



チャネルキャットフィッシュの正体



『アメリカナマズ』という魚をゴウナカ。ナマズ目アメリカナマズ属の魚で、標準和名で『チャネルキャットフィッシュ』と呼ばれ、1971年に養殖を目的として茨城県に導入された。しかし、近年、国内で問題視されている。このチャネルキャット

トフィッシュは雑食で、幼魚の時はエビなどの小動物を食べ、成魚になると小魚を主食とする。そのため、琵琶湖でも固有種が食べつくされ、琵琶湖の生態系が崩れることが懸念されている。また、ヒレには鋭いとげがあり、茨城県の霞ヶ浦の漁師が負傷する被害が起きている。2005年には特定外来種に指定され、飼育や繁殖などを行うことが禁止された。加えて緊急対策外来種に指



↑『霞天井』美味しいよHPより

30年後寿司が消える

HELP展では、気候変動の影響で30年後に失われることが予想される生き物や文化などについて紹介されていた。展示品は、様々な方と協力して『五感』で感じられるように展示されていた。その一部を紹介する。



残っているのはブリと菜味のネギとシヨウガだけだった。

【未来の伝言ダイヤル】



来場者が滋賀県や琵琶湖の環境についての想いを録音し、それが滋賀県の政治を担う人に届けられるそう。

【動物】片岡メリヤス氏によ



て作られたかわい動物のぬいぐるみ。この動物たちは全て絶滅危惧種に指定されている。原因が人間の活動だと知ると何とも言えない気持ちになった。

琵琶湖と向き合おう

琵琶湖のこれからのために私たちにできることが何でしょうか。今回のトークイベントの登壇者の方たちは「積極的に情報収集し琵琶湖について深く広く知ることが大事」と語っていました。たとえば『琵琶湖で泳ぐ』『鳥人間コンテストに行く』『ボランティアに行く』『えり漁の体験に行く』など。まずは関心を持つことから始まる。インタービューで尾下さんは、「ボランティア活動をするのがいいと思います。(鈴)

【手紙】会場には募金箱がある。募金の対象は琵琶湖や寿司、動物などで、自分の名前を登録したコインを入れると、機械が返事の手紙を書いてくれる。スタッフの方の話では琵琶湖に募金した人が多かったそう。



4人の登壇者と琵琶湖との関わり



駒井 健也氏

琵琶湖の伝統漁法えり漁の漁師。フィッシャーアーキテクト代表、志賀町漁業協同組合組合員など。漁師として、琵琶湖暮らしの魅力を発信中。滋賀県出身で、昔は滋賀から早く出たい思っていた。さまざまな国や地域を見ていくうちに、滋賀は恵まれた場所だと気づいた。



尾下 望氏

立命館大学経済学部在籍。行動経済に関するゼミにて、オーパーツーリズムを専攻。ボランティアサークルに所属しており、琵琶湖の外来水生植物の除去や長野県の竹林整備活動に取り組んでいる。大学で滋賀にきて、サークル活動で初めて琵琶湖と関わった。



中野 伸一氏

京大大学生態学研究センター長・教授。第十七回生態学琵琶湖賞受賞。研究対象水域は、湖沼、沿岸海洋、河川。

40年前に琵琶湖からの水で作られたコーヒーやカレーがカビ臭く感じ、高校生ながら「環境を変えないをあかん」と思っていた。



小松 聖児氏

ラオス料理人。京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科入学。地域研究学修士取得。ラオス料理と日本の食材の融合を図る料理活動『小松亭タマサート』を主催。小学生の頃、父に連れられ琵琶湖で魚釣りをしていたことから琵琶湖に興味を持った。